

## 一、津島寿一先生の終焉

二月七日の午前、津島先生はみずからの生命にいよいよ限界がきたことを自覚されてか、「今日は俺の往生の日である」と側近に告げられ、その日の夕刻、静かに気品の高い多彩な一生を閉じられました。それは実に静かであるが、おごそかな大往生でありました。そして葬儀や慰霊祭の段取り、更には秘書の処遇や遺産の処理を含む周到な遺書が、みずからの筆でしたためられてありました。何という悠揚迫らない素晴らしい終焉の姿でありましょう。先生の死は、先生の生に劣らず立派であり、先生の生に有終の完結をもたらしたものでありました。

津島先生は、明治二十一年一月一日、坂出市に生を享けられました。幼にして夙に神童の誉れの高い方でありました。坂出中央小学校から旧制丸亀中学に入学した先生は、宇多津を経由して徒歩で通学されました。その五年間、一日の欠席も、一度の遅参もなかつたことを、先生は大きい誇りとされておりました。先生は学業において最も優れた方でありましたが、頑健な体軀にも恵まれ、庭球の選手としても華々しい活躍をされました。

次いで先生は、旧制一高から東京帝国大学の法科に進まれました。その間先生は、常に綽々たる余裕を以て、学生生活を楽しまれ、しかも群衆を凌ぐ首位の成績を終始保たれたのであります。また先生は、谷崎潤一郎、君島一郎両氏をはじめ、終生渝ることのなかつた多くの友情に恵まれ、相共に文芸の林を逍遙してロマンチシズムを満喫され、存分に心身を鍛えて他日に備えられたのであります。よき時代とよき環境に恵まれ、よき師とよき友を得て、先生は花も実もある学生生活を送られたのであります。

卒業と共に先生は大きい期待を担われて大蔵省に出仕されました。大蔵省における津島先生は、先ず、綾子夫人という好配に恵まれ、その献身的な内助を得て官界の主流を華々しく歩まれました。若くして海外駐割財務官となり、堂々世界一流の政財界人を相手によく日本の立場を主張し、日本の国益を守り、みずからも第一流の国際人としての貴重な経験、更には得難い友情を身につけられました。四十歳に満たない「ヤング・ツシマ」は、かくてその令名を内外に謳われ、第一次世界大戦後における講和会議や軍縮会議にも、その花形として縦横に活躍されたのであります。

帰朝後の先生は、大蔵次官、日銀副総裁として高橋是清、池田成彬の両氏を助け、臨戦段階における財政金融の健全な運営と指導に当たられました。戦時中は求められて北支那開発株式会社総裁、或いは小磯内閣の大蔵大臣として、困難を極めた占領地域の経営と戦時財政の処理に心血

を注がれました。私が秘書官としてお仕えたのはその頃のことでした。戦後においては、東久邇終戦内閣の大蔵大臣、参議院議員、防衛庁長官、更には日本体育協会会長、日本庭球協会会長、交通安全協会会長、塩業組合中央会会長、日本棋院総裁、東京香川県人会会長として、その円熟した識見と豊かな経験を、惜しむところなく傾け尽くされ、幾たびか海外に使いして、対比賠償交渉、外債の発行借替等に尽力されたのであります。

私は、先生の完璧に近い生涯を、われわれ後進の龜鑑として、また郷党の誇りとして、敬仰の念を禁じ得ないものであります。しかし、私は、先生が国家公共に対する忠誠に加えて、終始、郷土に対する愛情、父母に対する孝養、恵まれない方々に対する同情に生き抜かれたことに対し、一層欽慕の情を覚えるものであります。十七巻に上る『芳塘随想』は正に先生のそうした内面の貴い記録であります。

先生はまた郷土人たるに相応しく、美術や工芸をこよなく愛好され、みずからも仏壇・机・本箱・スタンド等を制作されたが、それは既に素人の域を超えておられました。戦後目黒区の平町に仮寓をもたれたことがあったが、先生はその仮寓を「目黒工藝社」と呼んでおられた程であります。かくして先生の生涯は、機略縦横の政治的活動において必ずしもダイナミックなものではなかったが、官界人として政界人として更には文化人として、非凡なだけが享受し得る高尚にして

豊穰、多彩にして充実したものでありました。それは正に傑作とも申すべき一生でありました。さればこそ、「正三位勲一等旭日大綬章」という最高の勲記が先生の靈前に飾られたのであります。

有限の生涯において、果たすべき一切の義務を果たしおえられた先生は、今日、坂出名誉市民として、この地に帰ってこられました。坂出市は、先生が、終生愛惜して已まなかつた唯一の郷土であり、永い人生行路の終着点であり、先生の魂の永久のいこいの場であります。

時は正に薰風香る五月であります。先生はこよなく若葉の五月を好まれました。このとき、このところ、先生は生前先生の知遇を得、今改めて先生に敬慕の情を新たにされる郷土の人々に迎えられて、永久の安息につかれることになりました。

最早、われわれは、幽明境を隔てた先生の温容に接し、先生の教えを仰ぐことができなくなりました。しかしわれわれは、先生の知遇を得たことに無上の誇りと悦びを感じ、先生が倦むことなく歩まれた一筋の真実の道を追ってまいります。先生は、必ずやわれわれにとって不朽の道標となられて、われわれを導いてくださることを確信いたします。

それでは津島先生

いつまでも名残りはつきませんが、これでお別れいたします。郷土の懷に抱かれて、どうか安らかにお休みください。

(昭四二・五・七 坂出中央小学校の追悼式において)